

ナベリウス封印美術館の蒐集士

コレクタ

The Collectors of Naberius Sealed Museum

Naberius, alias Cerberus, Marchio est fortis, forma corvi se ostentans:
Si quando loquitur, rauacum edit vocem. Reddit & hominem amabilem
& artium intelligentem, cum primis in Rhetorica eximium.
Prolataturum & dignitatum jacturam parit. Novendecim legiones hunc audient.

手島史詞 イラスト一色



親愛なる妹へ

The Collectors of
Noboris
Seiden Museum

壮健だろうか、いまのお前にそういうのは不粹かもしだれないが、元氣でいるだろうか。

健康という意味では、兄は変わりない。ひとまず職を得て食うにも困っていない。

兄はいま、ナベリウスという名の美術館にいる。お前をそんな身体にしたアーティファクトを展示する不可解な場所だ。

どうやつて集めたのか、実に数百点以上もが収められている。

あんな恐ろしいものが数百点以上だ。

ここに並んでいる美術品が全てアーティファクトと考へると、胸くその悪さと氣味の悪さで吐き氣がしてくる。

未だに館長とやらには一度もお目にかかったことがないし、その代理も自分を“吸血鬼”と称するおかしなやつだ。

そして、もうひとり。

こいつが特に厄介で、ひと言で表すなら傲慢、自分勝手、厚顔無恥、唯我尊、常に人の神経を逆撫でするような言動を取るわ、人の手紙を勝手に読むわ、兄を木偶かなにかと勘違いをしているわ、おまけに勝手に人を膝枕にすることまである始末だ。

そしてなにより許せないのは、この女が魔術師であるということだ。

アーティファクトなどというものを生み出した、あの魔術師だ。

実に鼻持ちならない忌むべき相手ではあるが——同時にこの兄やお前以上に、根深い呪いを受けた人間でもある。

あんな身体になつてなお、あいつはアーティファクトを“破壊”ではなく“保護”したいのだという。

まつたくもつて理解できない思考の持ち主だが、しかし信の置けない人間ではないと思う。兄はそんな女とアーティファクトを回収することになった。

もちろん全てに納得したわけではない。

だが、ここにいればあのアーティファクトの手がかりが擋めるかもしれない。
ゆえに兄はしばらくここに留まることにした。

兄の心配はするな。早く仇を見つけ、お前が待つ故郷に帰る。

ナベリウス封印美術館より愛を込めて ヴォルフ・シュヴァーレン

天使の揺り籠

「……『天使の揺り籠』……ねえ」

とある豪華な応接室に、ひとりの青年の姿があつた。

いかにも胡散臭そうにそう言つたのは紅い髪の青年ヴァルフだ。

ワインのような紅。金髪ないし銀髪が大半を占めるこの地方では珍しい部類の髪の色だ。

鋭い眼差しは月を思わせる金色。その右目を断ち割るように縦一筋の裂傷。細身ながらも引き締まつた体躯をしており、腰には東洋の剣を差している。服装も軍人を思わせる制服で、およそ堅気の人間には見えない。

そんな容姿なのに、腕には古びたりボンが巻き付けられていた。

今年で二十歳になる彼は、信じがたいことに美術館の蒐集士——美術品回収を主とする職員だつた。足元には三つ首の番犬の紋章が刻まれた手鞄が置かれている。

ヴァルフは応接室の中をグルリと見回す。

ガラス張りの本棚にはびっしりと本が収められており、こここの主が知識欲の高い人間であることがうかがえるが、背表紙には『鍊金術師の奥義』『不死への渴望』『魔術師はどこへ消えたのか?』『神秘への扉』などと不安なタイトルが刻まれている。

壁やテーブルにも得体の知れない調度品がいくつも並んでいて、あまり趣味がよいとはいえなかつた。

そこにきて、この『天使の振り籠』の名だ。

ヴォルフが疑いたくなるのも無理はないだろう。

ボサボサの髪をかき上げてため息を漏らすと、ケラケラとおかしそうな笑い声が響く。

「ええ。とある魔術師が天使を捕獲するため製作したアーティファクトらしいですよお」

間延びしたしゃべり方のそれは、若い娘の声だった。

だが、応接室にいるのはヴォルフひとりだ。同じ部屋の中に声の主を見つけることはできない。それでもかまわず、ヴォルフは言葉を続けた。

「天使なんて本当にいるのか？」

「さあ？　わたしは見たことないのでなんとも。でも悪魔や吸血鬼がいるんですから別に天使がいてもいいんじゃないですかあ？」

「仮にいたとして、捕まえてどうするんだ？」

「そりゃあ、天使なんだからすごい力を持つてたりするんじやないんですかあ？　こう、神の奇跡的ななにかを起こせるとか、禁忌の知識を与えてもらえるとか」

そこで言葉を区切ると、声の主は躊躇うようにそれを言つた。

「……あとは、そんな天使の力を転用した兵器とか？」

ヴォルフは肩をすくめる。

「おぞましいものを作るもんだな」

「でも、ヴォルフさんの嫌いなアーティファクトってそういうものじやないんですか？」 といふか、
ヴォルフさんはどんなのだと思つてゐんですか？」

「……普通に、鑑賞したりするという選択肢もあるんじやないか？」

「意外と平和的です！」

心底意外そうな声が返つてきて、ヴォルフは髪をかきむしる。

「まあ、どうでもいいだろう。俺たちの仕事は回収だ。それがどんなものかは関係ない」

ヴォルフは興味がなさそうに相づちを打つた。

声の主もその話題を続けるつもりはないらしく、話に戻る。

「話を元に戻しますけど、形状としては鳥籠みたいなものらしいですねえ。イシュトリア館長代理
さんの話じや、けつこう大きいみたいです。それこそ人間がすっぽり入つちゃいそくなくらい？」
ふむ、とヴォルフは頷く。

「本物だと思うか？」

「実物を見てみないことにはなんとも。でも、ここになにかしらのアーティファクトがあるのは事

実だと思いますよお」

「……場所は、特定できないのか？」

「無茶言わないでくださいよお。わたしだってなんか空気が淀んでるなあとかやばそーだなあとかそんな感じにしか『見え』ないんですから」

「まあ、モノがここにあるならそれでいいさ」

素つ気ない答えだが、その声からは不思議と信頼のようなものが感じられた。

彼女が言うには、アーティファクトがあると大気の魔力という成分に異変が生じるものらしい。そして、彼女はそれを『見る』ことができるのだ。

声の主はまたしてもおかしそうな笑い声を漏らす。

「あらあ、ダメですよヴォルフさん？ いくらわたしが天使みたいな美少女だからって、危ない鳥籠に閉じ込めてあんなことやこんなことをしたいだなんて妄想を膨らませちゃあ」

相変わらず姿は見えないが、自分の肩を抱き身をくねらせて笑うのが目に浮かぶ声だつた。しかしヴォルフの方も慣れたものだ。

「ああ。それはいいな。そのままお前ごと封印してしまえば、少しは静かになるだろう」

「……あはー、こんな美少女をつかまえてそういうこと言つちやいます？」

「そういうことを自分でいう女に魅力を感じると思うか？」

「あー、あー、そういうこと言つちやうならもう知りませんからね。大事な商談の最中にポルターガイスト現象起こしたり怪しい声を響かせたり怪奇現象起こしてやるんですから！」

ヴォルフは心底面倒くさそうにため息を漏らした。

「ジブリル、幽靈のお前は、ものに触れることも人に声を聞かせることもできないだろう」

幽靈——それが、声の正体だ。

しかし声——ジブリルは負けじと言い募る。

「残念でしたあ。幽靈だけど幽靈じやありません。わたし、ただ単に誰の目にも見えないし声も聞こえないしにおいもしないしものにも触れないってだけで生きてますう。息だつてしてますしお腹も減りますう。でもあれれ？ なんででしよう。言つてて涙が出てきました」

「……あー、まあ、悪かった」

「なんですかその憐れんだ顔は！ もう頭にきました！」

「ならどうしろというのかと、ヴォルフはため息を漏らす。

「もういいです。ものに触れないからって嫌がらせできなわけじやないんですからね。商談中にパンツとか脱いで放り込んでやります。言つときますけど、わたしの身体から離れたものなら普通の人にも見えるんですからね！ そしたらもう悲惨ですよ？ ヴォルフさんなんて下着泥棒の破廉恥漢ですよ？ 恐れ戦いて許しを乞うといいんです！」

「……お前、その一部始終が俺には見えるんだって忘れてないか？」

「え……？」



誰にも見えないはずの少女だが、ヴォルフにだけはジブリルの姿が視認できていた。

ヴォルフの前には、腰に手を当て、たいそうご立腹な様子の少女が仁王立ちしている。

彼女がジブリルだ。

透けるような銀色の髪。下ろせば腰どころか膝まで届くような長い髪だ。それを深紅のリボンで束ね、背中に流している。整った鼻梁に控えめな桃色の唇。瞳の色はなんとも不可思議な董色だつた。

ヴォルフと同じような軍服調の、こちらはワンピースに身を包んでいる。どちらの制服も襟を飾る格子模様が特徴的である。裾はシルクのフリルで飾られ、手には絹の手袋をしていた。

華奢な肢体は優くさえあり、美しい少女ではあつた。

……口を開くと、その言動で台無しにしてしまうのだが。

——とはいって、俺以外には本当に誰も見てないからな……。

だから人前で……その、下着を脱ぐなどという突拍子もない言動が出てくるのだろう。

そんなジブリルは、カアツと頬を赤く染めてスカートを押さえた。

「……ヴォルフさん、えっちです」

「自分で言い出しておいてなにを言つてるんだ？」

呆れた声を返して、腰に差した小刀——『吼犬』に手を乗せる。

ヴォルフがこの少女を視認できるのは、この刀の力だ。

この『吼犬』は鼻が利く。本来見えるはずのないものも、その「におい」を嗅ぎ取つて視覚化さ

せる。試したことではないが、これを失えばヴォルフもジブリルが見えなくなるだろう。

つまり、これもヴォルフが忌み嫌う「アーティファクト」のひとつだった。

会話が途切れたせいか、ジブリルが応接室の中を探索し始める。とはいっても、調度品を眺めたりその後ろを覗き込んで「ひいつ蜘蛛のぞがーつ！」などと騒いでいるだけだが。

それから足を止めて「あれ？」と声を上げた。

「どうした？」

「肖像画じょぞうががあります。ここのご家族のですかね？」

目を向けてみると壁には一枚の肖像画が掛けられていた。大量の美術品に埋もれて、初めは気づかなかつた。

ヴォルフも立ち上がり、邪魔な美術品をどかして肖像画を眺めてみる。

「子供がふたりいるようだな」

そこに描かれているのは誰かの寝室だろうか。大きなベッドを背景に、三人の男女が描かれている。

中央のベッドで身を起こしているのは幼い少女で、他のふたりよりも色白に描かれている。その左によく顔立ちの似た少年が座つており、右側には杖つえを手にした紳士たんすが佇んでいる。

ヴォルフは、ふむと頷く。

「娘の方は病弱びやくなのかもな」

「不治の病に冒されて、それを治すためにアーティファクトを！ なんてありますね」「冗談にならないからやめろ」

自分でも不謹慎だとは思つたのだろう。ジブリルも肩をすくめるだけで反論しなかつた。

それからしげしげと肖像画を見つめ直す。

「しかしずいぶん仲のよさそうな兄妹ですね」

「というよりは父親が苦手意識を持たれているんじゃないのか？」

ベッドの少女はどこか強張つた笑みを浮かべているが、その手は兄らしき少年と繋ぎ合つていて、一方、父親の方は険しい表情だった。

ふむふむとその姿を観察して、ジブリルは「しかし」とため息を漏らした。

「ふたりとも、お父さんに似なくてよかつたですね」

家長のベルリングはでっぷりとした体形で、あまり見た目がよいとはいえないなかつた。対して子供ふたりはどちらも淡い金髪^{ブロンド}で、小さな顔に大きな瞳と、人形のように整つた容姿だった。恐らく、母親似なのだろう。

それはわからぬはないのだが……。

——お前は、自重という言葉を知らんのか……。

そろそろ頭が痛くなってきたところで、ヴォルフはスッと目を細める。外の廊下から誰かの足音が近づいてきたのだ。

——ひとりか。身長百六十から七十センチ。体重は百キロはあるか。中年の男といったところ

だな。

足音の大きさと間隔から鋭く観察し、ヴォルフは口を開く。

「ジブリル。そろそろ黙れ」

「……お仕事ですか？ ならさつきの失礼な発言も謝つてもらいたいもんですけどお」

「謝ったと思うんだが」

「心がこもってません！」

「悪かつたすまないごめんなさい申し訳ない失礼いたしました。これでいいか？ さつさと始めるぞ」

「……はーい」

すさまじく不服そうな顔をしながら、ジブリルは頷いた。



ほどなくして、応接室の扉がノックとともに開かれる。

現れたのは、でっぷりとした初老の紳士だつた。

（マルコス・ベルリング。この屋敷の主に間違いありませんね）

小声で囁くジブリルに、ヴォルフは頷く。

しかし紳士はヴォルフに目を向けるだけでジブリルには一瞥も向けない。彼にはジブリルが見え

ていないのだ。

（ほらほら、まずはこの髪の薄いおじさんを敬愛してやまないって感じの笑顔で迎える！）

敬意の欠片もない声音でジブリルは言う。

ヴォルフは仕方なく立ち上がり、顔の表情筋を駆使して柔和な笑みを浮かべた。

「お初にお目にかかります。ベルリング家御当主マルコス・ベルリング卿きようでいらっしゃいますね？」

わたくし、ナベリウス封印美術館コレクター蒐集士、ヴォルフ・シユヴァーレンと申します」
本式の呼び方をするなら学芸員キュレーターだが、武器を持ち、災厄さいがをばら撒まく美術品を回収するというのは
学芸員コレクターの職務に収まる仕事ではない。だから、ヴォルフたちは蒐集士と名乗る。

（ふーっ、似合わないです！）

先ほどのお返しのつもりなのだろう。隣で爆笑するジブリルに心中で『うるさい』と毒づきながら、それでもヴォルフは笑顔を保つ。

マルコスはぎこちない笑顔を浮かべて右手を差し出す。

「封印美術館……。本当に、存在したのか。遠路はるばるようこそおいでくださいました、シユヴァーレン殿」

握手を交わしながら、ヴォルフは違和感を抱いた。

ベルリングは落ち着かないように宙へ視線をさまよわせていて、手を握るのも形だけという具合にすぐ離す。

——これは嫌悪……いや、敵意か？

にこやかな笑みとは裏腹に、肌がひりつくような感覚があつた。常人なら感じることもないだろうささやかなものだが、友好的に思われていないと感じた。

それに気づいているのかいなかいのか、ジブリルは囁きを続ける。

（まずは相手を褒めちぎつてください。調度品の趣味がいいとか博識そうとか、なんかそんな感じで適当に！）

適当じや駄目だろうとため息を押し殺し、ヴォルフは笑顔を崩さぬよう言う。

「美術品愛好家として名高いとお聞きしておりましたが、なるほど見事なコレクションです。ベル

リング卿は目利きでいらっしゃる」

「顔の傷さえなければ、誰が聞いても気分がよくなるような完璧な世辞だつた。

ジブリルでさえ、呆気に取られるほどだつたのだが……。

「……ふん。なにが目利きなものか。こんなもの、ただのガラクタだ」

ベルリングは目に見えて憤慨していた。

（ちよつとちよつと、このおじさん、なんか怒つてません？ 大丈夫ですか？ わたし、やつぱり下着でも投げ込みましょうか？ さすがに下はキツイですけど上ならギリギリなんとか。きっと空気和みますよ？）

むしろこの上なく殺伐とした空気になるとと思うのだが……。

——こいつ、本当は俺を陥れたいだけなんじゃないか？

頼むから黙つてくれと、ヴォルフは頭を抱えたくなつた。

気を取り直してコホンと咳^{せき}払いをして、もう一度笑顔を作り直す。

「気分を害されたのでしたらお詫^わびいたします。ですがここに並ぶものは明確な価値を持った美術品です。ガラクタとおっしゃられるのはあまりにもつたないかと」

「ただの美術品など集めたところでなんの意味もない」

そのひと言に、ヴォルフは目を細める。

——不治の病に冒されて、それを治すためにアーティファクトを！ なんて——
さつきのジブリルの冗談だが、冗談ではなくなってきたようだ。

ベルリングは落ち着かないように部屋の中を歩き始める。ヴォルフは立つたままそれを目で追つた。

ジブリルが少し慎重な声で語りかける。

(ちょっとアプローチを変えた方がよさそうですね。先にお金見せてあげましょ
うともともと、ヴォルフたちはアーティファクトを買い取るためにここに来たのだ。

ヴォルフはベルリングに気取られない程度に領くと、足元の鞄をテーブルの上に置いた。
「どうやら、私は外交が不得手のようです。本題に入られますか？」

言いながら、鞄の留め具を外す。

そつと蓋^{ふた}を開くと中には筒状に束ねられた金貨が積まれていた。五十枚ごとに紙片でまとめてあり、それが二十本——つまり一千枚の金貨がここに納められていた。

ヴォルフは心の中で悪態をつく。

——くそ、どうりで重たいと思った。

金貨は一枚で三十グラムほどの重さだ。それが一千枚なのでこの小さな鞄ひとつで三十キログラム以上もあることになる。小さな屋敷なら土地ごと買えるような金額だった。

鞄の中身が金貨だとは聞いていたが、この量は想像していなかつた。

そんな金貨の山を見ても、ベルリングは眉ひとつ動かさなかつた。

ジブリルが額を押さえて呻く。

(あう、お金持ちにお金を見せても効果ないじやないですか)

——お前がやれと言つたんだろうが。

堪えきれず、ヴォルフは表情を険しくした。ベルリングがいなければ拳骨を下ろしていたかもしれない。

ベルリングは金貨を意にも留めずに問いかけてくる。

「それより、君の組織はなんと言つたかな。ナベリウス……？」

「ナベリウス封印美術館——ある『特殊な美術品』を専門的に扱う美術館でございます」

「そう、ナベリウスだつたな」

ベルリングは何度も頷いてその名前を繰り返す。

「つまり、貴君の美術館には『例の美術品』がいくつも収蔵されているわけか？」

「そう思つていただいて問題はありません」

「ほう。実に興味深い。たとえば、どういった代物があるのかね？」

踵を鳴らしてヴォルフに向き直ると、ベルリングは爛々と目を輝かせて問いかける。

ジブリルが渋面を浮かべた。

（あー……。この反応はよくないですね。ヴォルフさん、適当にはぐらかしてもらえます？）

わかつてはいる、と視線を返してヴォルフは笑顔を浮かべる。

「当館に収められれば、どんな美術品もただの美術品でございます。特筆して申し上げるようなことはございません。無論、その美しさはなんら損なわれるものではございませんが」

言葉を並べただけでなにも答えていない答えに、ベルリングの顔がカツと赤くなる。

「それでよく美術館を名乗れるものだな！」

「はい。当館は危険極まりないアーティファクトを恒久的に封印するための美術館でございます。

閲覧は、ただの副産物でございます」

自然と威圧的になつてしまふヴォルフの眼光に、ベルリングは戦いて後退る。

それでも初老の紳士は果敢に言い返した。

「だが、それはアーティファクトの独占ではないのか？ あれで美術館を開けるほどの数を揃えているというなら、貴君らは世界でさえ思うがままに動かせるはずだ」

「——ベルリング卿」

苛立ちを込めて、ヴォルフははつきりとこう告げた。

「アーティファクトに関わった者は例外なく破滅します。例外なく、です。わたくしや当館の

蒐集士も含めて例外はございません。あれは、そういうもののものです」

いくつも集めなくとも、ひとつが暴走するだけで街、あるいは国、もつとひどければ世界を滅ぼしかねない『呪い』が封じ込められているのだ。

だから暴走を始める前に封印しなければならない。

ヴォルフもジブリルも、それを誰よりも理解しているから封印美術館にいる。

冷たくベルリングを見据えて、ヴォルフは言う。

「間違つても使うなどという考えを持つな。手に入れただけのお前はまだ救われる可能性がある。アーティファクトなんてものは存在しなかつたのだと、全てを忘れろ」

隣で、ジブリルが頭を抱えた。

（……あもう。それじゃケンカ売つてるだけですよ）

しかし口で言うほど、その言葉に非難の意志は感じられなかつた。彼女もヴォルフの言葉が間違つていいとは思つていないので。

ベルリングは怯えたように後退り、背後の本棚にぶつかる。

「ひつ、そ、それで私のアーティファクトも奪いに来たというわけか！」

「それは誤解です。ベルリング卿。わたくしの目的はただの封印です。わたくし個人の感情としては、むしろこの場でたたき壊したいくらいですから」

できるだけ紳士的な口調を意識して言いなだめるが、ときすでに遅しだつた。

ガタツと身をすくめて、ベルリングは出口へと逃げていく。

「や、やはりアレは貴様らには渡さんぞ！」

捨て台詞のよううにそう言うと、ベルリングは出ていってしまう。

あとには、仮頂面のヴォルフとボカンとしたジブリルだけが取り残された。



主の逃げ出した応接室で、ジブリルが途方に暮れたように呟く。

「えー……。ちよつとこれ、どうするんですか。いまの、交渉決裂どころか強盗みたいに思われてますよ?」

「知らん。俺は事実を口にしただけだ」

「あなたのアーティファクトを壊してやりたいとかただの暴漢じゃないですか、なに考えてるんですか！」

「うつ……」

そこを指摘されると反論できなかつた。ついカツとなつて言つてしまつたのだ。

ヴォルフが縮こまると、ジブリルはなんでもなさそうに肩をすくめる。

「ま、実際ヴォルフさんがどう言つたとしてもご破算になつてたと思ひますけどね」

「……どういう意味だ？」

怪訝な顔をするヴォルフに、ジブリルはテーブルを示す。

「まず三〇分以上待たされているのに飲み物も出されない。よほど社交能力の低い人間でないなら、失礼だくらいには思いますよ。挨拶してからも自分は座ろうともしなかった。歓迎していない相手と同じ席に座りたくないという心理の表れだと思います。お金にも興味を示しませんですし、極めつけはヴォルフさんがぼーっと突っ立っているにも関わらず座れとも言わないところですね。意地悪でやつてるんじやなければ普通は気になりますよ」

握手のときに抱いた違和感は、どうやら正しかつたらしい。

「よく観察してるものだな」

「ふふん。見直しました？ わたしはただ可愛いだけでなく頭だっていいんですから！」

「あーはいはい」

投げやりな反応に、ジブリルがぶくつと頬を膨らませる。

「ヴォルフさん、やつぱりわたしのことおバカだと思ってるでしょう」

「そこまでは言つていないが」

「やつぱり変な子だとは思つてるつてことじやないですか！」

「それはそうだろう」

他にどう思えというのか、ヴォルフは心外そうに答えた。

ジブリルはブイッと顔を背けるが、仕事を忘れたわけではないのだろう。すぐに眉をひそめると唇に人差し指を当て、怪訝そうに呟いた。

「でも、おかしいですよね。だって——」

「——アーティフ、アクトを封印して、くれつて頼んできたのは、ベルリングさんなのに」

「ナベリウス封印美術館の蒐集士^{コレクター}」試読版第一弾は二二二まで。

試読版第二弾も近日中に公開の予定です。どう、期待!!

GAノベル初のミステリアス伝奇「ナベリウス封印美術館の蒐集士^{コレクター}」は2017年1月15日
発売予定です。